



市民と描く 未来の地球

欧州で提唱
フューチャー・アースは、欧州の科学者らでつくる「国際科学会議」などが、2001年の「国連持続可能な開発会議(リオ+20)」を機に提唱。WCRP(世界気候研究計画)など気候変動や生物多様性に関する四つの世界的な計画を中心に、フューチャー・アースに各研究を統合する方向で議論が進んでいる。

世界の科学者や市民が一緒になって環境問題を考える国際的な共同研究計画が、今夏から本格的に始まる。「フューチャー・アース(未来の地球)」と呼ばれ、人間の活動と深く関わる気候変動や生態系などの研究を進めるため、研究者だけではなく、市民の視点も計画段階から採り入れるのが特徴だ。国内では京都に拠点が置かれ、「真に社会に役立つ環境問題の解決策を目指す」という。

フューチャー・アース暫定事務局長の英ロンドン大フランス・パークアウト教授(社会科学)＝写真＝が、電子メールで読売新聞の取材に応じ、フューチャー・アースの意義について説明した。



「フューチャー・アースの考え方は、科学と社会の関係の変化の表れだ。科学は以前のように自立した活動ではなく、専門知識が社会に拡散するようになった。一方で、科学者が伝えるべきことがうまく伝わっていないという批判もある。

社会巻き込む システム作り

判もある。科学が社会の問いに確実に答えられるようにするには、科学的知識を生み出すプロセスすべてで社会を巻き込むのが、一つの方法だ。こうした視点が欠けていた最も顕著な事例は、気候変動だろう。気候変動が人的活動によって起こっており、その結果は人類や自然にとって深刻なものになるという議論は、20年にわたってあったが、現在も、世界的なエネルギー生産・利用のあり方を大きく変えるまでに至っていない。

気候変動や生態系…国際的共同研究

務める。

作業部会

「フューチャー・アース・プロジェクト」として全世界で約30の研究が内定しており、6月から順次始まる。そのうちの1つが、国立環境研究所(茨城県つくば市)などによる「世界炭素プロジェクト」だ。

「科学委員会」と、市民らで作る「関与委員会」で組織される。研究テーマには▽持続可能な地球社会への転換▽地球環境の探求▽地球デザインミックスの理解――の三つが掲げられている。

来月始動 4計画統合へ

昨年12月に東京で開かれた世界炭素プロジェクトの作業部会では、温室効果ガス削減の技術について多分野の研究者が議論した(国立環境研究所提供)

温室効果ガスの排出量を計測して世界地図に示したり、削減に有効な技術開発に取り組んだりする。「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)」も、同プロジェクトが算出した数値を利用して、01年に始まってから、様々な分野の科学者が議論を深めるため、エネルギー技術や政

策研究、大気科学の専門家らを集めた作業部会を開くなどしてきた。

手探り

フューチャー・アースには、地球環境研究の資金提供団体も複数参加しており、大きな動きとなりそうだ。一方で、有効な解決策が導き出せるか、未知数な点も多いと指摘されている。

フューチャー・アース

フューチャー・アースに統合される予定の四つの研究計画

- DIVERSITAS 生物多様性科学国際協同計画
- IGBP 地球圏・生物圏国際協同研究計画
- IHDP 地球環境変化の人間側面国際研究計画
- WCRP 世界気候研究計画

地球研フューチャー・アース推進室のハイン・マレー教授は「科学者の中には、市民が参加すると、データや成果の信頼性が落ちると考える人もいる。科学者と、市民や政策決定者、市民団体がどう関わり、議論するのが適切か、手探りで進めるしかない」と話している。

